

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01446

研究課題名（和文）ロールズ政治哲学と政治・経済思想：21世紀のリベラリズムをめざして

研究課題名（英文）Politics, Philosophy, and Economics in Rawls's Theory of Justice: Towards Liberalism in the 21st Century

研究代表者

宇野 重規 (Uno, Shigeki)

東京大学・社会科学研究所・教授

研究者番号：00292657

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ロールズおよびロールズ以降の政治哲学の進展を検討することによって、リベラルな民主的社会的構成要素となる諸概念の発展を考察した。最初にK. ForresterのIn the Shadow of Justiceを取り上げ、ロールズの正義論が戦後アメリカのリベラリズムの流れの中で形作られたものであることを確認した。次に『政治哲学講義』を検討し、特に彼のミル、マルクス解釈と正義論の関係を考察した。続いて『道徳哲学史講義』を検討し、彼のカント理解の変化と「公正としての正義」への影響を考察した。以上を通じ、ロールズの正義論を思想的に位置づけ直し、彼の政治哲学と政治思想史の結びつきを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果をまとめるべく、『リベラリズム読本』（仮題）と題した本の刊行を目指し、準備を進めている。同書の目的は、「現代においてリベラリズムとは何か」を幅広い読者に向けて示すことにある。ただし、これまでの類書とは異なり、ロールズ以降、より正確には『政治的リベラリズム』以降の時点に立って、リベラリズムを再検討することを特徴とする。一方、思想的な背景についてもより丁寧に解説する。基礎篇で「重なり合う合意」や「公共的理性」などを選び、応用篇として「平等」「認識論的デモクラシー」などを取り上げる。さらに背景篇では現在の政治思想史研究の水準から、ロック、カント、ヒュームなどを再検討する。

研究成果の概要（英文）：This study examines the development of concepts that constitute the components of a liberal democratic society by examining political philosophy of Rawls and his influences. First, we took up K. Forrester's In the Shadow of Justice and confirm that Rawls's theory of justice was formed within the context of postwar American liberalism. Next, we examined Rawls Lectures on the History of Political Philosophy, particularly the relationship between his interpretation of Mill and Marx and his theory of justice. Thirdly, we examined his Lectures of the History of Moral Philosophy and consider the change in his understanding of Kant and its influence on "Justice as Fairness." Through the above, we repositioned Rawls' theory of justice in intellectual history and confirm the close connection between his political philosophy and his understanding of history of political thought.

研究分野：政治学

キーワード：ロールズ 政治哲学 政治思想 経済思想 リベラリズム

1. 研究開始当初の背景

1971年に公刊された『正義論』に端を発するジョン・ロールズの正義論は、それ以降の政治哲学の発展を通じて、いまなお自由、平等、そして民主主義をめぐる多様な研究の重要な基軸である一方、刊行から半世紀近くを経て、それ自身が一つの歴史になりつつある。また、後期ロールズの議論にはカントからの影響も強く見られるが、こうしたロールズの思想的展開については、近年、ロールズ・アーカイブ(ハーバード大学)へのアクセスが可能になったことにより、一次資料、二次資料が多く活用できる状況にある。実際、そうしたロールズ思想の変遷について、初期ロールズの哲学的格闘や戦後に生まれたロールズ思想の時代性について多角的に分析する思想史研究が出始めている(Forrester, K., *In the Shadow of Justice*, Princeton University Press, 2019)。

2. 研究の目的

本研究は、ロールズの正義論について、現代政治哲学における最先端の研究と、政治思想史や経済思想(史)からの歴史的な再定位を結びつけることで、「平等かつ自由な社会とは何か」というロールズの最も根源的な問いに答えることを目指す。この問いは啓蒙思想以来繰り返し論じられてきたが、リベラル・デモクラシーの危機が言われる今日、ますますその重要性を増している。この作業を通じて、政治哲学と政治思想史、さらに経済思想(史)研究の研究者のプラットフォームを作り、21世紀のリベラルな民主的社会のあり方を考察する。

本研究はさらに、ロールズおよびロールズ以降の政治哲学の進展を多角的に検討することによって、リベラルな民主的社会の構成要素となる諸概念が近現代においてどのように発展したのかを明らかにし、その実践的含意を検討する。その際、上記の目的を達成するために、政治哲学・政治思想史・経済思想(史)のアプローチを統合して、その進展を総合的に検討していくことを目指す。現代政治哲学と政治・経済思想史の両方のアプローチから迫ることで、多彩な側面をもつロールズの政治哲学をより正確に捉えることが課題である。

3. 研究の方法

こうした独自性を活かすために、以下のような分担体制を構成する。

* 政治哲学班

平等論および現代のデモクラシー政治哲学を専門とする宇野・井上・宮本・田畑によって構成される。

* 政治思想史班

18世紀政治思想を研究する犬塚・網谷と19-20世紀政治思想を研究する馬路によって構成される。

* 経済思想班

社会選択理論を専門とする加藤、経済思想史を専門とする野原・高見から構成される。

以上の分担体制をとりつつ、本研究ではロールズ政治哲学にとって重要な二つの概念を特に取り上げ、それぞれの概念史を描き、ロールズおよびロールズ以降の政治哲学の進展の本質に迫る。

平等と自由はロールズの「正義の二原理」の根幹を構成する概念であり、ロールズはこの概念を、政治思想の長い歴史的伝統の下に正当化している。本研究では、自由と平等の対立の歴史と、その部分的解決としてロールズ以降の政治哲学や経済思想において繰り返し刷新されてきた「機会の平等」に着目することで、自由と平等の概念史を再構成する。

ロールズはホブズ、ロック、カントといった啓蒙思想からの強い影響を受けているが、自由と平等を希求する近代社会を支えた政治思想の文脈のなかで、ロールズ思想を再定位することが肝要である。機会の平等は、機会としての自由の平等な配分という点において、この二つの概念を統一的に理解しようとするものであり、機会の平等の考え方がどのように発展してきたのかを明らかにする必要がある。

このような検討を踏まえ、ロールズを出発点としてロナルド・ドゥオーキン、セン、ジョン・ローマーへと発展していった平等論を軸に、現代政治哲学における機会の平等の概念的再構成を試みる。機会の平等は、ロールズの正義の第二原理やセンの潜在能力アプローチにおいて鍵となる基礎的観念であり、それぞれが、人々の社会的バックグラウンドの多様性を踏まえ、実質的な機会の平等を提示している。一方で、マーク・フローベイらによって、機会の平等が生み出す社会的矛盾の可能性も指摘されている。例えば、不確実性があるとき、事前のレベルでみて期待厚生水準を平等化するという意味での機会の平等と、たまたま起きた運に基づく事後的厚生水準の格差を平等化することは相反する。このようなフローベイら現代厚生経済学者の貢献を、政治哲学の概念史の中に位置づける必要がある。

さらに、機会の大きさは自由の重要な側面である以上、機会の平等の分析から自由の概念の分析に目を向ける必要がある。先に言及したセンの潜在能力アプローチは、社会における「機会としての自由」、すなわち、機会が少ない個人に対し優先的に機会を広く与えることを目指している。しかしながら、社会的機会に恵まれていない者に機会をより多く付与するというセンの自由のポジティブな捉え方は、スタイナーやオーツカからの左翼リバタリアンによって批判されている。左翼リバタリアンは、ロック以来の不介入主義的国家像を重視しながらも平等を希求する立場であり、現代政治哲学における重要な一翼を担っている。ロールズやセンの自由が社会的存在としての個人が享受すべき機会を表現する一方、左翼リバタリアンは自らを所有する存在としての人間の権原に基づき、それへの干渉によって損なわれるものとして自由をネガティブに捉える。こうした差異に注目しながら、多元的な自由を統御できる社会原理を考察していく。

デモクラシー

現代政治哲学においては、正義を民主主義との関係で検討する傾向があるが、この点についてもロールズ『正義論』の影響に拠るところが大きい。ロールズは、『正義論』において、集合的意志決定システムとしての民主主義が正義に適うことを示した。その際、ロールズは、正義の二原理に適った正しい決定が、実際の社会でどのような手続きを踏むことで到達しうるかを検討する。民主主義は不完全な手続き的正義と理解され、必ず正答にたどり着くわけではないが、その見込みの高い政体とされる。

この民主的手続き主義の考え方は、今日の民主主義論において活発に議論されている認知民主主義の進展とも結びついている。認知民主主義は、民主的手続きを通じて常に正しい意思決定が導かれる見込みが、少なくとも他の政体よりも高いことを示す構想である。この構想によれば、広範な人々の参加や熟議を通じての意見集約は、限られた専門家が下す判断よりも間違っている見込みが小さい。近年は、専門家さえも免れない可謬性やピア同士の根源的不合意をベースに、

正義と民主主義の複合的関係を捉えようとする議論もある (Estlund, D., *Democratic Authority: A Philosophical Framework*. Princeton University Press, 2007)。

こうした背景の下、コンドルセの「陪審定理」の考え方に由来する認知民主主義も様々なかたちで議論されてきた。陪審定理は、ランダムよりも高い正答を導く能力を有する人間が平均的な構成員であれば、その数が多いほど、集合的意思決定の結果はより正しくなるとする定理である。陪審定理をめぐるのは、政治哲学でも社会選択理論に基づく分析を導入すること、その規範的含意への考察が精緻なものになりつつある。近年の研究動向によれば、単純に市民たちの多数決を信頼しうるものとみる見方よりは、どのイシューや領域で民主主義が機能するかを冷静に考察する立場が有力である (Goodin, R.E. and Spiekermann, K., *An Epistemic Theory of Democracy*. Oxford University Press, 2018)。本研究では、認知民主主義の概念史を描きながら、ロールズの正義論の立場から近年の民主主義論を再考するとともに、陪審定理のモデルを再定式化することによって、認知民主主義における専門家の役割をより明確なものにする。

4. 研究成果

最初に検討したのは、K. Forrester の *In the Shadow of Justice* であった。Forrester は批判理論系の intellectual history を専門とする研究者であるが、政治学(史)、経済学(史)、国際関係論、社会学、そして哲学に至る幅広い知識を活用して、ロールズおよびロールズ主義の思想史を紐解いている。同書を共に読むことで、ロールズの政治哲学を専門とする研究者とそうでない研究者、政治哲学研究者と政治思想史研究者、さらに経済思想研究の間でのロールズ理解の異同を確認し、多様なアプローチを総合する本プロジェクトの方向性を確認した。結果として、Forrester のロールズの正義論が戦後アメリカのリベラリズムの流れの中で形作られたものであること、ロールズの政治哲学がアメリカの主要な政治的イデオロギーとして継承された反面、良心的不服従、人種問題、国際政治などの現実政治の諸問題とは一定の距離を置いたことが確認できた。

次に『ロールズ政治哲学講義』のうち、特にホッブズ、ルソー、ヒューム、ジョン・スチュアート・ミル、およびマルクスについて検討した。極めてオリジナルなロールズの政治哲学史理解が、彼の正義論といかなる関係にあるかをめぐり、活発な議論が交わされた。また、同じくロールズの『道徳哲学史講義』のうち、特にカントの章について検討を行なった。ロールズは 1970 年代半ば以降、カント倫理学にフォーカスをあてて研究を進めたが、この時期はまさに「公正としての正義」を執筆するのと同じ時期であった。ロールズによるカント理解の変化は、この時期のロールズの問題意識の変化を探る上でも極めて重要である。このようにロールズのカント理解に即して、この時期のロールズの思想的展開を理解することが方法論的に見ても有効であることが明らかになった。

最終的には、これまでの成果をまとめるべく『リベラリズム読本』(仮題)と題した本の刊行を目指し、そのための協議を重ねた。既に出版社も決定しており、企画案を作成し、執筆者会議も開催した。この本の目的は、「現代においてリベラリズムとは何か」を幅広い読者に向けて示すことにある。ただし、これまでの類書とは異なり、ロールズ以降、より正確には『政治的リベラリズム』以降の時点に立って、リベラリズムを再検討することを特徴とする。一方、思想史研究者の間では、ロールズ的な哲学的リベラリズムに批判的な立場が多いことも踏まえ、思想史的背景についてより丁寧に解説することとした。執筆項目としては基礎篇で「公正としての正義」「重なり合う合意」「公共的理性」「正統性」「民主主義」「理想理論・非理想理論」「基本財とケイパビリティ」などを選び、その応用篇として「所有権」「戦争」「フェミニズム」「平等」「差

別・障害」「認識論的デモクラシー」「左派リバタリアニズム」「グローバル・ジャスティス」「移民問題」「気候正義」「世代間正義」などを取り上げる。合わせて背景篇では現在の政治思想史研究の水準から、ロック、カント、ヒュームなどを再検討する。同書の刊行(2025 年度を予定)によって、本研究の成果が結実することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Susumu Cato	4. 巻 222
2. 論文標題 When is weak Pareto equivalent to strong Pareto?	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Economics Letters	6. 最初と最後の頁 110953 ~ 110953
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.econlet.2022.110953	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Cato Susumu, Nakamura Hiroki	4. 巻 14
2. 論文標題 Understanding the Function of a Social Business Ecosystem	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Sustainability	6. 最初と最後の頁 9325 ~ 9325
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/su14159325	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Akira Inoue	4. 巻 50(5)
2. 論文標題 The Harshness Objection Is Not (Too) Harsh for Luck Egalitarianism	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Philosophia	6. 最初と最後の頁 2571-2583
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11406-022-00562-4	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Akira Inoue	4. 巻 -
2. 論文標題 A Lockean Theory of Climate Justice for Food Security	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Ethics	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s10892-022-09414-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomohito Baji	4. 巻 -
2. 論文標題 An Apex of the Racialization of the World	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Politics	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1057/s41311-023-00441-z	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤晋・宮本雅也	4. 巻 74
2. 論文標題 実践と公正：フェアプレイをめぐる概念分析と経済分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原慎司	4. 巻 9(2)
2. 論文標題 サン・ピエールにおける戦争・平和・商業、そしてルソーへ：「啓蒙」の構図を捉え直す	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 愛知学院大学論叢・経済学研究	6. 最初と最後の頁 89-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomohito Baji	4. 巻 98
2. 論文標題 Colonial Policy Studies in Japan: Racial Visions of Nan'yo, or the Early Creation of a Global South	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Affairs	6. 最初と最後の頁 165-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1093/ia/iiaab207	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Cato, S., Iida, T., Ishida, K., Ito, A., Katsumata, H., McElwain, K. M., & Shoji, M.	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 Social media infodemics and social distancing under the COVID-19 pandemic: public good provisions under uncertainty	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Global Health Action	6. 最初と最後の頁 1995958-
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/16549716.2021.1995958	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Cato, S., Remila, E., & Solal, P.	4. 巻 199(3)
2. 論文標題 Infinite-population approval voting: A proposal	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Synthese	6. 最初と最後の頁 10181-10209
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11229-021-03242-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Bossert, W., Cato, S., & Kamaga, K.	4. 巻 -
2. 論文標題 Critical-level sufficientarianism	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Political Philosophy	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jopp.12267	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部崇史・石田柊・宮本雅也	4. 巻 8
2. 論文標題 関係論的平等主義の再出発：「分配か社会関係か」を越えて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法と哲学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宇野重規	4. 巻 1137
2. 論文標題 政治哲学と「世俗化」論：マルセル・ゴーシェとチャールズ・テイラー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 84-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野原慎司	4. 巻 83-2・3
2. 論文標題 コンドルセ：貧困と平等のアンチノミーを超えて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 経済学論集	6. 最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akira Inoue, Masahiro Zenkyo, and Haruya Sakamoto	4. 巻 Vol. 4
2. 論文標題 Making the Veil of Ignorance Work: Evidence from Survey Experiments	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Oxford Studies in Experimental Philosophy	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.31234/osf.io/yx58s	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tomohito Baji	4. 巻 46(5)
2. 論文標題 The British Commonwealth as Liberal International Avatar: With the Spines of Burke	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 History of European Ideas	6. 最初と最後の頁 649-665
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/01916599.2020.1746084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤晋	4. 巻 71(1)
2. 論文標題 正義論における規則と実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会科学研究	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34607/jssiss.71.1_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 井上彰
2. 発表標題 The All-Subjected Principle, Justice, and Hume
3. 学会等名 ヒューム研究学会第32回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上彰
2. 発表標題 Epistemic Democracy versus Epistocracy?
3. 学会等名 日本政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 馬路智仁
2. 発表標題 島嶼海の主権を求めて 太平洋の自然環境と歴史叙述
3. 学会等名 政治思想学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomohito Baji
2. 発表標題 Ecological Internationalism? Postcolonial and Archipelagic Visions of the Pacific
3. 学会等名 International Conference 'Antiliberal Internationalism in the 20th Century: Beyond Left and Right?' (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 馬路智仁
2. 発表標題 南洋と植民政策学 太平洋島嶼、人種(主義)、初期国際関係論
3. 学会等名 日本政治学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 犬塚元
2. 発表標題 ホップズは本当に多元的国制を提唱した「助言者」だったか？
3. 学会等名 社会思想史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本雅也
2. 発表標題 関係論に基づく構造変革責任の検討
3. 学会等名 政治経済学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井上彰・秦正樹
2. 発表標題 How Can We Accept “OUR” Decisions? An Experimental Study on Lottocracy, Epistocracy, and Democracy
3. 学会等名 日本政治学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 宇野重規	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論社	5. 総ページ数 288
3. 書名 日本の保守とリベラル	

1. 著者名 犬塚元・河野有理・森川輝一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 320
3. 書名 政治学入門 歴史と思想から学ぶ	

1. 著者名 永井彰・日暮雅夫・舟場保之（分担執筆第3章 田畑真一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 批判的社会理論の今日的可能性	

1. 著者名 宇野重規	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 近代日本の「知」を考える。：西と東との往来	

1. 著者名 小川公代・吉野由利・河野哲也・森田直子・大河内昌・犬塚元・井上櫻子・川津雅江・土井良子・原田範行・大石和欣	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 308
3. 書名 感受性とジェンダー 共感 の文化と近現代ヨーロッパ	

1. 著者名 加藤晋, 伊藤亜聖, 石田賢示, 飯田高	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 256
3. 書名 デジタル化時代の「人間の条件」：ディストピアをいかに回避するか?	

1. 著者名 宇野重規	4. 発行年 2021年
2. 出版社 大和書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 自分で始めた人たち-社会を変える新しい民主主義	

1. 著者名 宇野重規	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 277
3. 書名 民主主義とは何か	

1. 著者名 Tomohito Baji	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 245
3. 書名 The International Thought of Alfred Zimmern: Classicism, Zionism and the Shadow of Commonwealth	

1. 著者名 井上彰	4. 発行年 2020年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 202
3. 書名 知のフィールドガイド - 異なる声に耳を澄ませる - 』	

1. 著者名 田畑真一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 322
3. 書名 ハーバーマスを読む	

1. 著者名 網谷 壮介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 社会評論社	5. 総ページ数 391
3. 書名 平等の哲学入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮本 雅也 (Miyamoto Masaya) (20802086)	東京大学・大学院総合文化研究科・特別研究員 (12601)	
研究分担者	犬塚 元 (Inuzuka Hajime) (30313224)	法政大学・法学部・教授 (32675)	
研究分担者	加藤 晋 (Kato Susumu) (30553101)	東京大学・社会科学研究所・准教授 (12601)	
研究分担者	野原 慎司 (Nohara Shinji) (30725685)	東京大学・大学院経済学研究科(経済学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	網谷 壮介 (Amitani Sosuke) (30838272)	獨協大学・法学部・准教授 (32406)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高見 典和 (Takami Norikazu) (60708494)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	井上 彰 (Inoue Akira) (80535097)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	馬路 智仁 (Baji Tomohito) (80779257)	東京大学・大学院総合文化研究科・准教授 (12601)	
研究分担者	田畑 真一 (Tabata Shinichi) (90634767)	北海道教育大学・教育学部・准教授 (10102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------